

## 第3回講演会

第1部 「今、知っておきたいアジア」

～企業の進出に伴って～

第2部 「今、伝えたい、海外でいざというとき何を…？」

～赴任家族の体験から～

2012年2月29日（水曜日）実施

主 催 フレンズ 帰国生 母の会

後 援 東京海上日動火災保険株式会社

## 目次

開催要項 .....	2
開会あいさつ .....	3
来賓あいさつ .....	4
第1部	
講師プロフィール .....	5
講演「今、知っておきたいアジア」～企業の進出に伴って～ .....	6
第2部	
「今、伝えたい、海外でいざという時何を・・・？」～赴任家族の体験から～	
講演者プロフィール .....	28
「タイにおける危機管理」 .....	29
「中国の危機管理」 .....	33
フレンズの活動のご案内 .....	40

## 開催要項

主 催 フレンズ 帰国生 母の会  
後 援 東京海上日動火災保険株式会社  
日 時 2012年2月29日(水) 13時30分～16時30分  
場 所 新丸ビル コンファレンススクエア 9階 Room901

## プログラム

### 第1部

13:30 開 会 あいさつ フレンズ 帰国生 母の会 代表 稲垣 芙佐子  
東京海上日動火災保険株式会社  
理事 企業営業開発部長 佐無田 一清

13:40 講 演 「今、知っておきたいアジア」～企業の進出に伴って～  
前駐マレーシア大使 堀江 正彦

15:00 質疑応答

15:15 休 憩

### 第2部

15:30 「今、伝えたい、海外でいざというとき何を・・・？」 ～赴任家族の体験から～  
－タイ－ フレンズ 帰国生 母の会 スタッフ 荒木 圭子  
－中国－ フレンズ 帰国生 母の会 スタッフ 石川 清美

16:00 質疑応答

16:15 フレンズの活動のご案内 フレンズ 帰国生 母の会 スタッフ 松尾 ひろみ

16:30 閉 会

第1部・第2部 司会 西尾 規子  
(敬称略)

## 開会あいさつ

フレンズ 帰国生 母の会  
代表 稲垣 芙佐子

本日はあいにくの雪となり、お足もとの悪い所、私どもの講演会にご参加いただきまして誠にありがとうございます。

私どもの会は1983年10月に海外滞在経験のある母親たちが設立したボランティア団体で、活動は28年続いて参りました。

私どもがこれまで活動を続けて来られましたのは、私どもの活動にご賛同くださった賛助企業、関係機関やスタッフとしてまた国内外のネットワーク会員として体験をご提供くださった多くの方々のご支援の賜と心より感謝申し上げます。特に、東京海上日動火災保険株式会社様には1987年より本社ビル内に私どもの活動の場として事務所をご提供いただき、今回を含め3回にわたる講演会、及び過去13回のシンポジウムの後援をいただき、毎年多大なご支援、賛助をいただいております。

この場をお借り致しまして、心より厚く御礼申し上げます。

本日の講演会ですが、発展を遂げるアジアに焦点を当てて、企画致しました。平成22年の統計では海外長期在留邦人者数は右肩上がりに増え、758,788人となっております。地域別では平成18年にアジア地域の長期在留邦人者数が北米地域を抜き、トップとなり、平成22年度は38.46%、291,830人となっております。

このところの円高や震災の影響から、今後もアジアへの企業進出が増えると思われませんが、家族を伴って赴任することに不安をお持ちになり、単身赴任を選択なさっている方も多いのではないのでしょうか。

そこで、第1部は「今、知っておきたいアジア」～企業の進出に伴って～と題しまして、前駐マレーシア堀江正彦大使を講師にお迎えし、アジアの現状をお話いただきます。大使のご経験から感じられたことや思いなどを交え、赴任地で互いを尊重し理解を深めながらビジネスや生活をするためのアドバイスや心構えについて、お話しいただければと思っております。

第2部は「今、伝えたい、海外でいざという時何を・・・？」～赴任家族の体験から～と題してアジアで生活し、危機に遭遇した私どものスタッフが、その時の会社の対応や家族の思いなどを赴任家族の立場からお話しさせていただきます。

最後に私どもの活動についてもご紹介させていただきます。

派遣社員が赴任地で円滑に仕事をし、社員を支える家族が安心して生活するために、企業としてどのような支援ができるのかをお考えいただく上で、またこれから赴任なさる方々に本日の講演会が何らかのお役に立てれば幸いです。

簡単でございますが、開会のご挨拶とさせていただきます。

## 来賓あいさつ

東京海上日動火災保険株式会社  
理事 企業営業開発部長 佐無田 一清

皆様こんにちは。

ただいまご紹介を賜りました東京海上日動の佐無田でございます。

今日は足元の悪い中、またお忙しい中、ご参集をかくもいただきありがとうございます。後援企業を代表いたしまして、一言だけご挨拶を述べさせていただきます。

昨年は2月にニュージーランドの地震があり、その後3・11の東日本震災、夏には台風11号・12号、秋にはタイで洪水被害があり、国の内外を問わず、国・行政・各企業さま、わたくしどもも家族・個人それぞれの立場で災害を経験したということだと思います。東北地方の湾岸地域、タイでも操業再開できずに非常に苦勞されている企業さんもまだまだございます。そういう中であって、去年ほど日本人全体のリスク感応度といいますかリスクに対する考え方が大きく変わった年はなかったのではないかと思います。

それからまた同時にサプライズチェーンに代表されるように、大企業だけでなく、先ほどの代表のお話にもありましたように、多くの企業さまが想定以上に海外進出されグローバル化が進んでいるとつくづく痛感させられた昨今ではなかっただろうかと思いました。

先ほどお話がありましたように、フレンズ帰国生母の会は28年を迎えていらっしゃるんですが、私ども東京海上と相互に支援をさせていただき始めたのはちょうど26年前ですから、その開設後の2年3年後から色々なことをさせていただきました。その中で特に、シンポジウムの開催、相談会の開催、帰国生の方が国内でどのような学校に入れるか、受け入れてもらえるか、逐一調査をされてレポートを出していただき、様々な支援や取り組みによってフレンズさんは色々な海外から戻られる方の支えになられていると、つくづく感じる次第でございます。

引き続きこのような活動を通じてますます活動の輪を広げていただければと思う次第でございます。

挨拶が長くなりますと、堀江大使のお時間がなくなりますので、これ位にさせていただきます。これから3時間ほどのプログラムですが、是非最後までお付き合いいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

## 講師 堀江 正彦氏 プロフィール

- 1946年（昭和21年） 岡山県津山市に生まれる
- 1969年（昭和44年） 大阪大学経済学部 卒業
- 1971年（昭和46年） 米国チューレーン大学大学院経済学修士課程 修了
- 1973年（昭和48年） 大阪大学法学部 卒業  
外務省入省、経済局経済統合課
- 1975年（昭和50年） フランス国家行政学院（ENA）に留学
- 1983年（昭和58年） 国際連合事務局 明石康国連事務次長の特別補佐官
- 1986年（昭和61年） 外務大臣官房会計課首席
- 1988年（昭和63年） 外務大臣官房総務課（文化交流第一課）企画官
- 1989年（平成元年） 外務省経済局国際機関第二課長
- 1990年（平成02年） 在デンマーク日本大使館参事官
- 1992年（平成04年） 在ケニア日本大使館公使
- 1995年（平成07年） 外務省 経済協力局技術協力課長
- 1996年（平成08年） 外務省経済協力局政策課長
- 1998年（平成10年） 在フランス日本大使公使
- 2002年（平成14年） 防衛庁防衛参事官（国際関係担当）
- 2004年（平成16年） 駐カタール特命全権大使
- 2007年（平成19年） 駐マレーシア特命全権大使
- 2011年（平成23年） 現職 特命全権大使（地球環境問題担当）

## 第1部 講演

### 「今、知っておきたいアジア」 ～企業の進出に伴って～

前駐マレーシア大使 堀江 正彦氏

ご紹介ありがとうございました。外務省から参りました地球環境問題を担当しております堀江と申します。本日は「フレンズ 帰国生 母の会」の皆様方がやっておられる活動の一つとしてこの会を開いていただきまして、心からお礼を申し上げます。

稲垣代表からもお話がありましたけれども、「フレンズ 帰国生 母の会」がやっておられる活動は、日本がこれからも海外と良い関係を築いていくという意味では非常に重要な活動で、心から皆様方の活動をますます確実なものにしていかれることを願っています。

東京海上日動火災の部長さんから26年にわたりサポートされているとのお話がありましたが、賛助会員としてこの会をサポートしてくださっている会社の代表の方々も本日はお越しになっていらっしゃるのかと思います。「フレンズ 帰国生 母の会」に代わりまして皆様方のご支援・ご協力をありがたいと感謝申し上げます。

私は昨年5月にマレーシアから戻ってまいりました。今回のテーマはアジア全般ということですが、まずマレーシアの辺りから話をさせていただきたいと思います。

本日ここにお越しになられた方々の中でマレーシアに行ったことがある方、どれくらいおられますか？手を挙げていただけますか？ 大変多いですね。私はこれまで大学、ビジネスサークル、経済同友会、ロータリークラブなど色々なところで講演していますが、今日ほど手が上がったところは今までありません。東京の大学でも手の上がり方が数パーセントというところも結構ありますし、地方に行くともっと少ない。今日手が上がったのはほぼ半分以上ですので、マレーシアの説明はいらないかも知れませんね。

マレーシアはご存じのとおり、日本とほぼ国土が同じ広さです。人口は2700万人ですから、日本の1/4、日本と同じ国土で人口が1/4ですから、日本より4倍くらいスペイシーな感じのする国だと言えます。あとでアジア全体の絵がありますが、マレーシアはタイとシンガポールに挟まれたマレー半島に位置する国で、熱帯ですので年中暖かいというかやや暑く31℃～32℃、ゴルフをするには少し暑い、もう1、2℃低いと良いのになというところ。夕方入道雲が出てきてスコールがざっと降る雨季があり、乾季とはいえ時々スコールが起こります。しかしほとんどの日が朝から晴天で、今日のように雪だから困ったな、とかオーバーコートをそろそろ片づけようとかを考える必要が全くなく、一年中同じものを着、かつ同じような生活リズムで生活できるので、逆に言うと我々の記憶が鈍ってきます。日本だったら、この間フレンズの方とお会いしたのは寒いオーバーコートを着ていた頃だったなと思いがすが、マレーシアだとなかなかそういうことはない。だんだんボケて

くると思わざるを得ないようなところがありますが、楽しい国であります。

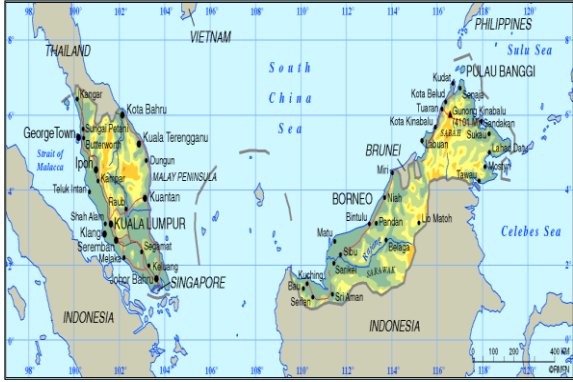
マレーシアがどういう国かという、多人種・多文化・多宗教なので、たくさんの人種の方がそれぞれの伝統・文化・宗教を維持した中でみんながお互いのことを尊重し合いながら、全体として相和して生活している国です。

## マレーシア

### 一般事情

### 地図

- 人口: 2,840万人(10年)
- 面積: 33万平方キロ  
(日本の約87%)
- 民族: マレー系(66%)、  
中華系(23%)、インド系(7%)
- 宗教: イスラム教、仏教、  
ヒンズー教、キリスト教
- 言語: マレー語、中国語、  
英語、タミル語
- 一人当たりGNI:  
8,323米ドル(10年)
- 政体: 立憲君主制
- 元首: アブドゥル・ハリム・ム  
アザム・シャー 第14代国王
- 首相: ナジブ・ラザク



全体の中心部分がマレー系で、マレー人が66%の6割強、中華系で華人が2割強の23%、インド系が1割弱の7%くらいの人口構成です。マレーシアは、タイとシンガポールに挟まれたマレー半島の国だと言いましたが、向かいにインドネシアと半分ずつ分けているボルネオ島があり、そこの北側サバ州・南側サラワク州もマレーシアです。この二つの州に挟まれたところにブルネイという小さな国があり、天然ガスで財を成し、日本にも輸出しています。マレーシアからも我々は天然ガスを輸入しています。

我々が家庭で料理をする時にガスを使っているとMade in Malaysiaとは出てこないですが、実はMade in Malaysiaのガスがほとんどです。ブルネイもですが、マレーシアは、日本にとって重要なライフライン、生命線をキープしている非常に重要な国です。

このサバ、サラワクには先住民と言いますか、大体30~40位の違った部族の原住民が住んでいます。先程申し上げたマレー系と中国系とインド系、さらにサバ、サラワクの30~40位の部族の原住民、そういった人々がマレーシアに住んでいます。このボルネオの30~40の部族はそれぞれ言葉が違います。近い言葉を使っている場合もありますが、それぞれに違う言葉を使用しているということです。



こうなった歴史は、簡単に申し上げると、マレーシアで非常に豊富に存在していた錫によるものです。19世紀の半ば頃に錫鉱山を採掘する事によって、錫を利用していかなければならない。その錫鉱山の労働者として、イギリスの植民地政策の一環で、華人は南中国からの移民として連れてこられ、その後ずっとマレーシアに住み着いています。したがって今は2世代目、3世代目、場合によっては4世代目の方々もいます。

それからインド系の人々は、20世紀の初頭に自動車文明がだんだん拡張して、自動車のためにタイヤを必要とし、ゴムの需要が大変伸び、マレーシアで採取していたゴムのプランテーションの為に多くの労働者が必要で、それに適している南インドの方々を移民として連れてきて働かせたという歴史があるわけです。

従って、マレーシアではマレー系は土地の子です。そこに移民として中国の南の方から来た華人と、インドの南部の方から来たインド人、そういう人たちが言ってみれば外国から、よそ者と言ってはいけませんけれども、移民として来たのです。国のあり方というのは色々興味深い点がありますが、「それぞれの持っている宗教、伝統、文化をそのまま維持して良い」というのが、マレーシアの政策です。

お隣のインドネシアでは、むしろ同化政策、**assimilation policy** と言って、中国の人でもインドネシア系のイスラムの名前をつけて、同化していく。マレーシアにおりますと、「あなたのお名前は？」と言う前に、だいたい顔を見れば見当がつくのが半分以上ですけれども、名前が「ヨー・ポンポン」、あるいは「ヨー・ティオンレイレイ」ですとこの人は中国系だなと想像がつかますね。それからマレー系の人たちは「アブドゥル・ラーマン」だとか、イスラムの名前の方がほとんどですから、これもだいたい見当がつく。インド系の方々は「ベンジャミン」だとか「ジム」だとか「ポール」といった、むしろ英米系のファーストネームを付けている人たちが結構多い。それから、顔色を見ても、より黒かったり、白っぽかったり、色々な皮膚の色でだいたいの見当は付くと思います。

私がちょうど4年前にマレーシアに行った時は、8月末だったのですが、丁度、その時はラマダンの真最中でした。ラマダンというのはご存知だと思いますが、イスラムの教えで1ヶ月に亘って食事をしない断食の月です。朝太陽が上がって、日没まで、水一滴も飲まずに1ヶ月過ごすという時期です。非常に宗教的な儀式ですが、マレー系のイスラムの方々はその教えを守って断食をする、それが開けるとハリラヤというお祭り、「お腹が空いても食べないで苦しい断食の1ヶ月を乗り切った」ことを祝うお祭りがあります。これがマレーシアでは1ヶ月くらい続き、首相、副首相、大臣から、経済界の要人の方々、そういった名士の方々がオープンハウスをします。そういう方たちは大きな家を構えていますから、誰が行っても構わない。行くと美味しいご馳走があったり、場合によっては音楽があったり、色々な催し物があったりする。そこにはマレー系のイスラムの人たちだけではなく、仏教徒やクリスチャンの中国系の人、あるいはヒンズー教徒がほとんどのインド系の人たちや私どものような各国の大使、あるいは外交官、そういう人たちもみんなこぞってハリ

ラヤのオープンハウスに行くことが出来る。行くと歓待して頂いて、美味しいものを食べて帰ってくる。それが連日連夜、多くの大臣がそれぞれやって下さるので、1ヶ月位に渡って非常に楽しい時を過ごせます。

それが終わり 11 月に入ると、インド系の人たちには、ヒンズー教のお祭りでディパバリという、光を主体にした宗教儀式があります。これも宗教儀式ではありますが、インド系の名士の方々がオープンハウスをして、イスラムの人も仏教の私どもも、それから中国系のクリスチャンの人でも、ヒンズー教の人でも、そこに行ってディパバリのお祭りを一緒に楽しむ。美味しい料理を食べたり、インド系の踊りがあつたり、音楽があつたりと、楽しむことができるわけですね。

そうこうしてくると、今度は 12 月でクリスマスがございます。日本ほどクリスマスケーキが売れることはありませんが、それでもクリスチャンの方々がそれを楽しまれる。クリスマスの時は、あまりオープンハウスはしませんがみんなそれぞれが楽しむ。

そうすると今度は 1 月のお正月。これはやはり日本人だけの、元旦を祝うのは、我々の儀式でしょうか。

ところが、中国系の人たちは旧暦でやっておりますから、春節がだいたい 1 月の終わりから 2 月頃にある。その時にはご存知のような龍の踊りがあつたり、爆竹は今ほとんど使われませんが、歌舞音曲付きの大変美味しい中華料理も賞味したりすることが出来ます。このように、マレーシアというところは、お互いそれぞれの人種の文化、伝統というものを、それぞれお互いにこぞって楽しみ合うという、ある意味では、一年中楽しみ続けているという印象がどうしても否めないくらい楽しいところだと思います。

いずれにしても先ほど申し上げたようにイスラムの方、マレー系の方々が、イスラムを信奉している、中国系の方々が、仏教、一部キリスト教、それからヒンズー教の方々、それからサバ、サラワクの先住民の方々も、それぞれの部族に従ったお祝い事が毎年ありますから、サバ、サラワクの方に住んでおられる方は、併せて楽しむ事が出来る国です。

これが先ほど冒頭で申し上げた多人種、多文化、多宗教国家の意味です。彼らはお互いコミュニケーションする時はほとんどが英語です。英語の会話能力は非常に高いですし、マレーシア人は上手な英語を喋られる方が多いと思います。

今日は「今、知っておきたいアジア」ということなので、企業関係者の方々に海外進出を考えておられる方もいらっしゃるだろうと思います。企業が海外進出を図るときにどういった判断基準があるのか、幾つか挙げてみました。

まず直接投資をしようとする相手国側におけるインフラストラクチャーですね。いわゆる道路であるとか、港湾であるとか、あるいは電力、あるいはそういった交通機関等々、

病院、学校そういうものに至るまで、社会基盤がちゃんと発達しているかどうかということです。

## 投資誘致の比較優位性

- 発達したインフラストラクチャー
- 安価で良質の労働力
- 安定した政治経済情勢
- 原材料・エネルギーの確保
- 国内市場・輸出市場の存在
- コミュニケーション能力
- 現地の人々の感情
- 物価と気候風土の良さ
- 政府の提供する優遇措置

これは先ほど手を挙げていただいた皆様方にご存じかと思いますが、クアラルンプール国際空港は、黒川紀章が建築した、「森の中にあるエアポート、エアポートの中に森がある」というコンセプトでできた素晴らしい空港です。そこからクアラルンプールの方に行く途中、インフラが発達した素晴らしい大きな道路があって、また街に入ったら入ったで、それなりのほぼ先進国に近いのではないかとと思われるような景観が広がっている。

後でお話し申し上げますけれども、マハティール首相の「ビジョン 2020」というのがあり、これはマレーシアという国を 2020 年には先進国入りさせるというビジョンで、もう 10 年以上も前に彼が提唱したものです。今年が 2012 年、あと 8 年でなるかどうか。私は数年前から申し上げておりますが、マレーシアは 2020 年より前に先進国入りすることになると思っております。

次に、安価で良質の労働力があるかどうか。これも相対的な話ではありますが、マレーシアには技術力を持った良い労働力があります。

それから政治経済情勢が安定しているかどうか。これは特にマレーシアは独立して大体 55 年ですが、その間に首相はわずか 6 人です。わずか 5 年の間に 6 人の首相が交代する国

とは全く違う。マハティール首相は 22 年間在職して、マレーシア近代化の父と言われておりますとおり、マレーシアの近代化に成功した首相です。このマハティールが一番長期政権でしたが、政治経済的に安定していると言えます。

冒頭申し上げましたけれども、土地の子たるマレー系の人々、それから移民の人々である中国系、インド系の人々、この人たちが完全に平等であるのかどうかというと、日本の国内状況を考えていただいても同じだと思いますが、全く同じ footing（地位）ではございません。それでも、移民の子たちである中華系、インド系の人たちも選挙権はちゃんと持っています。マレーシア政府の内閣を見てもその中に中国系の大臣もいればインド系の大臣も相当数います。そういった意味では政治的には充分参画している。

どういうところで違いがあるかということ、我々日本企業が進出する時に、資本の 30%は Bumi Putra（ブミプトラ）と言って、マレー系が持たなければいけないという規制がございました。最近ではそういった規制はなくそうではないかと、製造業分野では 100%日本の資本で企業を立ち上げることができますが、まだ分野によっては残っています。

今も続いている部分の一つとして、「東方政策」(Look East Policy) に基づいた留学生制度があり、若いマレーシア人の学生が日本ないし韓国に留学して、工学を中心に勉強するという政策があります。この制度で国費留学できる人たちはマレー系の学生たちだけです。したがって中華系の人々は別の奨学金を獲得する必要があります。その結果、我が国の文科省が持っている国費留学生制度はほとんどが中国系の人たちあるいはインド系の人たちが受給者になっています。中国系、インド系の学生たちは、自分たちで留学する時の原資を、奨学金をどこかからひっばってくるか、自分でアルバイトするか、両親にお願いするかということになります。このようにマレー系の人たちは土地の子、自分たちの国だからということで、国家予算で留学することができますが、移民の子孫である中華系、インド系の人たちは自分たちでやっていかなければならない。したがって、時に人種間の摩擦を招いたり、あるいは軋轢を起こしたりということがありますが、全体としてマレーシア人の人たちというのはお互いの文化伝統というものを尊重しながら平和裏に生活していると言えます。

それから原材料・エネルギーの確保。この辺のところはまさに先程申し上げたとおり、天然ガスがマレーシアには出ますし、特にサラワク州などは水力発電の宝庫です。そういった意味で、電力その他のエネルギー資源の獲得、原材料についても大きな問題はありませぬ。

それから国内市場・輸出市場の存在というものがあるかどうかですが、マレーシアは 2700 万人の国で、やや国民・人口の規模が小さめです。したがって国内市場は他の国に比べて弱点であると言えると思います。しかしながら、製造業の場合、マレーシアを唯一の市場

として製造するわけではない。ほとんどが欧米向けであったり、日本向けであったり、ASEAN 地域内であったり、アジア向けであったりするものですから、マレーシアそのものの人口が比較的少なくても、問題は二次的であることとなります。

コミュニケーション能力。これは先程から申し上げた通り、英語によるコミュニケーション能力は ASEAN 一と言っても良いぐらいかもしれない。フィリピンなども英語圏ですからフィリピンの人たちも英語に不自由しないと思います。

それから現地の人々の感情。これはあとで触れたいと思いますが、先程のマハティール首相は 1981 年にマレーシアの首相になられ、その首相就任の時に「Look East Policy」を提唱しました。この「Look East Policy」というのは、彼らから見て東というのはすなわち日本であり韓国であり、日本が戦後復興を非常に短い期間に成し遂げて世界の経済大国の一つになったので、「君たち若い学生が、復興に成功したプロセスを日本に行って勉強して来い」というものです。特に、工学を勉強させて、国造りに必要な質の良いエンジニアを育成するというので、マレーシアから日本に、韓国にも行きましたけれども、ほとんどは日本に向けて、その翌年の 1982 年から送り始めたわけです。

しかし、若いマレーシア人が日本の大学に行ってすぐ勉強について行けるかというと、日本に来る時の問題点はやはり言葉、日本語の難しさ、これが日本の社会をどちらかというと世界から孤立させている要因の一つになっている。しかしながらマハティールという人は、「その日本語をマスターすることによって日本の良き伝統・文化を身につけることにもなる、テクノロジーを勉強して、帰って来てマレーシアの国造りに貢献するんだ」というアイデアでした。

我が国もそれに協力するために事前教育を 2 年間やります。そのため日本から日本語の先生を送る。そして、物理・数学・化学、この 3 科目の先生も送る。それでマラヤ大学の AAJ と言っていますが研修センターで 2 年間勉強させるわけです。みっちり日本語と物理・数学・化学を勉強させる。2 年間の勉強が終わって卒業する時に試験があり、合格した学生が日本にやって来る。だいたい毎年そこからは 200 人ぐらいの学生が来ます。

また、もう一つ、別に UNISEL という大学に ADJ プログラムがあって、そこでも 100 名近くの学生がセレクトされる。さらにもう一つ、別の学校で高専（高等専門学校）にも大体 70 人ぐらいの学生を派遣するプログラムがあります。したがって、約 370 名から 400 名弱ぐらいの学生が毎年日本にやって来るわけです。日本での受け入れはほとんど国公立の大学が多いですが、私立も幾つかあります。全国 50 ぐらいの大学ですから、津々浦々どこに行っても大学に立ち寄って、「マレーシアの学生が来ていますか？」と言うと毎年 4、5 名は来ていることが多いですから、4 年制の大学であれば 20 名ぐらいのマレーシア人が留学していることとなります。

いずれにしてもそういった形で国造りに必要なエンジニアを養成するために「Look East

Policy」をやってきて、これが今年で 30 周年になります。これまで日本に留学した学生と研修生とを全部を含めると 13,000 人が育っています。この 13,000 人の人たちは、日本とマレーシアの関係を強固なものにする観点からは、非常に重要な役割を果たしていると思います。彼らは、30 年前に二十歳すぎで日本に行っているの、一期生は今日では 50 歳代なのです。

ですから卒業生は重要なポストに就いています。例えば、マレーシアの今日の高等教育省の次官が東方政策の卒業生ですし、水・エネルギー省の次官が同じく東方政策の卒業生です。またマレーシア企業の重要な部長クラス等々、さらには大学に帰って教授になっている卒業生もたくさんいます。それから、トヨタ、ホンダ、ソニー、パナソニック、東芝、日立、こういった大手の日本企業のみならず、中小企業も含めて、卒業生をたくさん採用していただいております。そういった企業の中では、その卒業生の人たちが、日本人経営陣とそれからマレーシア労働者の間の非常に良い潤滑油の役割を果たしている。

そういった意味でも貴重な訳ですが、マレーシアで 22 年間も務めたマハティール首相が「マレーシア人は日本人を見習わなければいけない」という東方政策を提唱し、いまだに 30 年間も続いている訳ですから、マレーシアの隅々の非常に深いところにまで、日本や日本人に対する尊敬の度合は非常に高いものがあります。そういう意味で、日本に対する現地の人々の感情は、ASEAN 一だということが言えるのではないかなと思っているわけです。

次に、「物価と気候風土の良さ」。マレーシアは物価が安い。ホテルに泊まる場合でも、実際に一万円そこそこあれば、高級ホテルに泊まることができるし、食事にしても、非常に安い価格で、中華料理も、インド料理も、おいしいナシラマから始まるいろいろなマレー系の料理も、また日本料理は大変人気ですから日本料理店もたくさんあるし、食の文化も楽しむことができる。「気候風土」についても、タイの大洪水を例に出すまでもなく、地震・津波も他の国よりも被害は少なく、マレーシアは恵まれた国かなと思います。

それから「政府の提供する優遇措置」。マレーシアとしては、日本企業のみならず、欧米系の企業等々、一流企業のみならず中小企業の方々にもぜひ来て貰いたいと言っておりますので、政府としては例えば、法人税の免除、あるいは減免、企業の収益を本国に送金するのも自由、また実際に企業をそこに進出させて立ち上がるまでの間、手取り足取りいろいろな形で窓口が面倒を見てくれます。

このように、マレーシアは直接投資を考える時の判断基準をいずれもクリアしているといえます。実際、マレーシアには 1400 社の日本企業が進出しています。この 1400 社というのは多いか少ないか、これも相対的な問題ですが、マレーシアという 2700 万人の国との関係で言えば、非常に多い数だと思います。この 1400 社の中でおよそ半分が製造業関係です。その製造業の中で、一番重要なのが電子・電機。液晶テレビやブルーレイプレーヤー

などの製造が中心です。それから自動車産業も重要で、トヨタ、ダイハツ、ホンダという企業がでてきております。

面白い点は、ソニーにしてもパナソニックにしても、今の彼らの液晶テレビ、ブルーレイの生産基地はどこにあるのか、それはご存知のように日本ではなく、マレーシアです。そしてマレーシアで製造を行っているところが世界のハブになっているのです。ソニー、パナソニック、日立などの企業がこれまで20年、30年以上に亘ってマレーシアで製造活動をやっているわけですが、その間に、マレーシアの従業員が育ってきているのです。

日本式製造ライン、日本式、ホンダ式、トヨタ式、いろいろなものがあるし、3Sであるとか、5Sであるとか、生産活動を効率的にするための活動がありますが、そういったものも従業員に浸み込んできている。

今、何が行われているかという、マレーシアで10年、20年、30年経験したマレーシア人が、世界のソニーのネットワークキングのブランチに派遣されるのです。その派遣先で在庫部長や人事部長などの、いろいろな重要なポストを歴任する、それで3年なり4年なりの経験を積みマレーシアに戻ってきて、その後任の人が行くということが行われています。何を言いたいかという、マレーシアの人達は冒頭申し上げたように、多人種、多文化、多宗教、多言語国家で生活しているから、グローバリゼーションの世の中で、世界中どこでも適用力があり重宝されるわけです。

イスラムの中東に派遣する場合でも、彼等はイスラムですからよくわかっている。欧米に送ろうかというときも、キリスト教であれ、何教であれ、マレーシアに居ながらにしてそういったものが身についている、いわゆるマレーシアの社会そのものが多文化社会なのです。だから異文化経験が居ながらにして身についたまま、かつ、英語力が高いレベルですから、どこに送っても、即、到着の翌日から仕事がバリバリとできる、ということで、まさにマレーシアにあるソニー、パナソニックが、世界規模での人材養成センターになっているわけです。

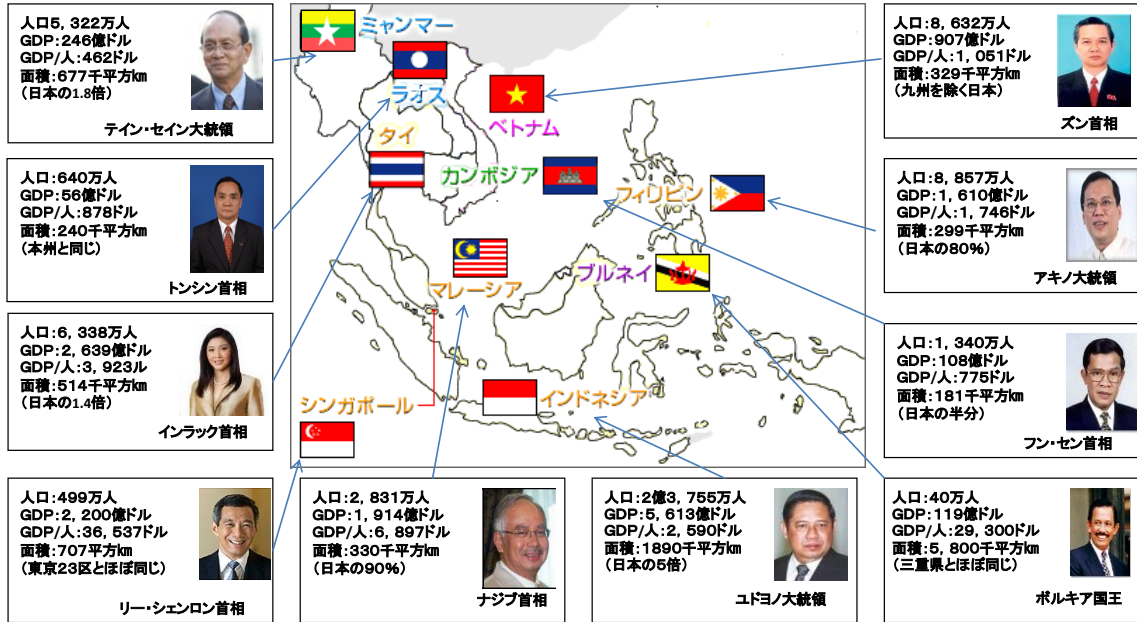
因みに、物価と気候風土の良さ、というお話をしましたけれども、日本の年金生活者の方々の中には、自分もこれだけ働き蜂みたいにして働いてきたが、ここらあたりで海外で第二の人生を楽しんでみたいなという方々が結構おられます。そういう方々を対象に毎年どこが一番行きたいかという人気投票があります。過去5年、なんと第一位がマレーシアなのです。これが10年前はハワイだったり、オーストラリアだったり、あるいはタイだったり、その当時マレーシアは10位くらいでした。8年くらい前に8位になり、6年前は5位くらいになって、2005年からトップに躍り出ました。そのあと5年間、ずっとマレーシアが1位。私はさらにこのあと5年間は1位の座は揺るがないだろうと思っています。

来られている方々、年金生活者の方々を送り出している団体の方々と話しをしていると、今は1000人、2000人くらいの方が来ていますが、近々1万人に届く日が来るだろうと言っておられます。

## ASEAN概要

### 基本データ

- 人口：約5.8億人（世界の約9%）
- GDP：約1.5兆ドル（世界の約3%）
- 貿易額：約1.6兆円（世界の約6%）→日本の貿易額全体の約14%（中国、米に次ぎ、第3位）
- 日本の直接投資残高：約70兆円（全体の約10%）



マレーシアはASEANの中核にあります。ASEANは今日「ASEAN10」といって10カ国で出来あがっています。左の方から見ていきますと、ビルマ、ミャンマー、それからラオス、インラックさんのいるタイ、リーシェンロンさんのシンガポール、そして私がお話ししているマレーシアのナジブ首相、インドネシアのユドヨノ大統領、ブルネイのボルキア国王、カンボジアのフン・セン首相、フィリピンのアキノ大統領、そしてベトナムのズン首相です。

このASEANというのは、1967年にできましたが、その時は「ASEAN5」と言っておりまして、オリジナルの原メンバーはタイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、この5カ国でした。その後ブルネイが入り、ベトナムが入り、ラオス、ミャンマーが入って、最後にカンボジアが入って、今日では10カ国になっています。

このASEANは自分たちで経済共同体を作りたいということで、ASEAN地域内では関税のかからないFPA（Free Paid Agreement）が出来あがっています。

将来は人の動きもビザやパスポートがなくても良いような、ヨーロッパのEUのような形の経済統合体を作っていきたいと考えており、2015年までに経済共同体、文化共同体、安全保障共同体の3つの共同体を作っていこうと頑張っているわけです。



私が今日、ここまで話しをした段階で、冒頭のご紹介の話も含めて、お話ししたいなと思っているのは、この日本とマレーシア、そして日本と ASEAN 諸国との非常に友好的な関係というのは、これまでずっとそうであったわけではない。そもそも ASEAN は共産主義に対抗するための自由主義国の砦を作ろうとして出来あがったわけですが、ASEAN が発足した 1967 年は中国の文化大革命があり、ベトナムもご存知のようにベトナム戦争があったし、カンボジアではポル・ポトのキリングフィールドの話がありましたし、いろいろな歴史があって、今日の ASEAN になっています。

日本との関係で忘れてならないのは 1974 年、当時は 60 年代、70 年代、日本の首相が新しい首相になったら、まず行かなければならないのはどこか、アメリカは重要です、しかしながら、東南アジアが非常に重要だったのです。今のアジアは中国であり、韓国であり、それから ASEAN であります、当時はまず ASEAN だったのです。しかし ASEAN 5 カ国を首相が歴訪するというのは至難の技です。5 カ国をゴールデンウィークの 6 日か 7 日の休みの間に全部飛び回って訪問するということがずっと続いていたわけです。

1974 年当時、田中総理が ASEAN 歴訪されました。ところがこの ASEAN 5 カ国ではどういう状況だったかということ、反日感情が非常に高まっていた時代だったのです。

従ってバンコクに降り立っても、街に行くまでの間ずっと反日デモが繰り広げられていた。次にインドネシアのジャカルタの空港に着いた、しかし空港からジャカルタの市内に行くまでの高速道路は全部デモ隊が席卷して行くことができなかった。どうしたかということ、地道に脇道に降りて走り、ジャカルタの街まで行った、それで迎賓館に入ったものの、街中反日デモですから、総理は公式日程を消化することができず、籠城したまま仕方なく宿舎の迎賓館からヘリコプターで空港まで飛んで、それで這々の体で日本に帰ってきたのです。

これはどうしてかということ、その当時 ASEAN 諸国には日本の製品が洪水のように溢れていて、かつ日本の企業が進出してきている、かつて自分たちの国を侵略してきた日本が今度は経済侵略をするのではないかという懸念というか危惧が、ASEAN 諸国の間にあったわけです。

ここで重要なのは経済侵略かどうかという点もさることながら、その時の日本人ビジネスマンの行動が、日本人同士で固まって生活していたというのが一つの大きなポイントでした。企業から派遣されて現地に行った、しかし、彼らは「現地の文化を研究しよう」、「現地の人々がどういう習慣で生活しているのかということを学ぼう」、あるいは「現地語をマスターして、ある程度自分の下で働いている人たちとは挨拶できるぐらいはしよう」、「毎朝現地の言葉でこんにちは、おはようと言いながら従業員に話しかけよう」と努力していた人がどれぐらいいたか、殆どいなかったのです。

日本人の経営陣の従業員たちとの交流はあまりなく、現地の人たちを管理層に抜擢する

こともほとんどしていなかったのだらうと思います。かつ日本人は週末にはゴルフに行っても、日本人とだけしかプレーしていなかった。現地の人たちとゴルフクラブで人的交流をするような人も少なかったのかもしれない。

田中総理がASEANから這々の体で帰ってきて、「これじゃあ、いかん」と言って、経団連、経済同友会、関経連等々経済団体をお願いして、「ぜひ企業で行動規範を作ってくれないか」と発破をかけた。そこで経済団体が作った行動規範は、①現地の文化を学ぼう、②現地の言葉を学ぼう、③現地の人たちを登用しよう等々、要するにもっと日本人が現地の社会を理解した上で、現地の人たちと交流しなければいけないというものでした。

日本人の生き様というものは、日本国内でもさることながら、海外に出た時にそういう形で努力をしていかないと、相手国で「友好的には迎えられない」ということだったのだと思います。日本人は一生懸命努力しようということになれば、団結しますから、徐々に努力の効果も出てきました。そして次に総理になられた方が福田総理です。

1977年に福田総理が総理になられたときに、ASEAN歴訪をされました。その時のフィリピンでの政策スピーチが、我々巷で言う「福田ドクトリン」です。

この「福田ドクトリン」は3つの柱からできていて、「我が国は平和国家に徹する、軍国主義への道をたどることは二度とない」ことを誓い、「アジアの人々と心と心の触れ合う信頼関係を構築する」、そして三本目に「ASEANの国々の人たちが共同体を作っていく、東南アジア諸国の平和と安定に対する彼らの努力を日本は支援していきたい」。これが福田総理のスピーチの骨子、三本柱だったのです。この三本柱を中心とした福田スピーチのことを「福田ドクトリン」と言うておまして、これは1977年、今から相当前のスピーチではありますが、未だに我々外交官はこれを念頭に置きながらアジアの人たちと交流していかなければいけない、と肝に銘じていると言えます。

### 福田ドクトリン(1977年)

1. 我が国は平和国家に徹する。
2. 心と心の触れあう信頼関係を構築する。
3. 東南アジア諸国の平和と繁栄に寄与する。

### 東方政策(Look East Policy 1982年)

日本や韓国に学生を留学させ、工学を中心に学ばせる。併せ、労働倫理、規律などを学び取らせることにより、マレーシアの国造りに生かす。

こうした努力と相まって、日本の JICA が ODA (Official Development Assistance) という公的な経済援助資金で、無償資金協力、技術協力、円借款という形の援助をずっとやってきましたので、我が国が国民の血税を使いながらアジアの国々のインフラ、道路、港湾、病院、学校、あるいは農業振興、産業振興などのための専門家派遣も含め、過去何十年にも亘ってやってきた努力が結実し、ASEAN 諸国、中国、韓国、インドとの関係は、非常に友好的なものになっている。もちろん、中国なり韓国なりとの間には領土問題があり、摩擦が生じることがありますが、中国を例にとっても何万という日本企業が行って日本と中国との経済関係はもう切っても切れない形になっているわけです。領土問題が起こるといろいろな形で軋轢、摩擦が起きますが、経済的には運命共同体になっているというのが現実だと思います。

日本と ASEAN との関係というのは、反日感情が高まる 70 年代、そして 77 年の「福田ドクトリン」、そういった経緯を経て、また ODA で我が国が ASEAN 諸国を中心に彼らの国づくりをお手伝いしてきた、であるがゆえに、今日のアジアの活況があり、かつアジアの経済がまさに世界の中心になっていく姿があるわけです。

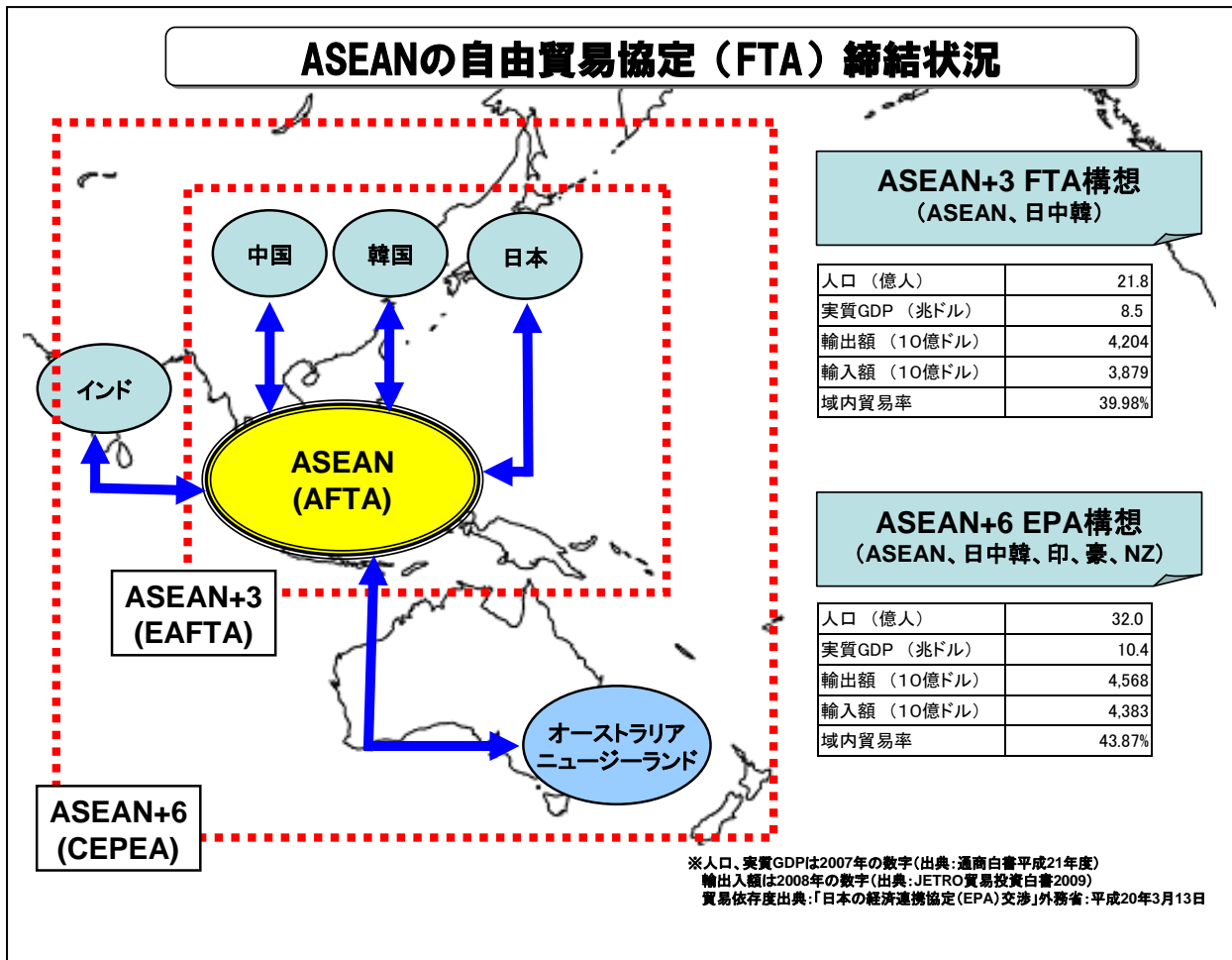
この「福田ドクトリン」の 5 年後の 1982 年にマハティール首相が提唱した Look East Policy は、30 年にわたって継続されている。そういう意味でもマレーシアは我が国にとって特別に重要な国じゃないかなと、前駐マレーシア大使としては言いたくなるということでございます。

経済連携の話は簡単に申し上げますと、この ASEAN という国が 10 か国の間ですでに FTA が出来上がっています。したがって、マレーシアで生産されたものは隣のカンボジアでもタイでもインドネシアでも、どこに行く時も関税がゼロになるという合意が出来上がっています。

テレビや電子機器があるときに、ソニーであったりパナソニックであったりしますが、後ろにまわって見ると Made in Malaysia と小さく書かれているということが結構あります。いや、最近ではそういうもののほうが多いかもしれない。ただ、だんだん Samsung のほうが伸びてきていますから、日本製品が逆に少なくなっている。残念ながら、そういう現象が起こっています。

マレーシアに日本から輸入したり、韓国から輸入した部品や、あるいはマレーシアで作った部品を使って液晶テレビをつくったりする。それは ASEAN 域内であれば全部関税はかからないということで貿易拡大ができるわけです。その ASEAN と日本との間でも FTA 協定ができております。こうした FTA が韓国と ASEAN の間でもできている、中国と ASEAN の間でもできている。これを我々は ASEAN プラス 3 と呼んでいます。それから、ASEAN プラス 6 というのがあって、これにはインド・オーストラリア・ニュージーランドが入っています。

## ASEANの自由貿易協定（FTA）締結状況



これら 6 カ国それぞれが ASEAN との間で自由貿易協定というのが出来上がっている。そして、この図をご覧くださいとお分かりの通り、ASEAN がまさに金の卵なのです。この金の卵にこれら 6 カ国が全部ぶら下がっているわけです。したがって日本から韓国に輸出するときも、極端に言えばマレーシアを経由して、韓国に再輸出すれば関税はかからないで済む、という仕組みが出来上がっているわけです。

ただ、日本と韓国の間、日本と中国との間は悲しいかな、それはできていない。これがなぜできていないかというと、ご案内の通り、日本の農業分野がどうしても開放できない、農業が大きなネックになり、それを克服することができない。野田政権も、「これはやらなければいけない」と言っていますし、韓国のイ・ミョンバク大統領も「日本ともやりたいけれど中国とが先だ、戦略的にもやっつけていかなければいけない」と言っている。だから場合によっては、韓国と中国の方が先に EPA、FTA というものができてしまうかもしれない。日本だけ外れてしまうことが起こるかもしれない。

日本が貿易を非常に重要な要素としてこれまで生きてきた、生存し続けてきたという意味でも、どうにかしなければいけないと思います。日本がガットラウンドを経てきて WTO

の時代になったがドーハアジェンダで結局スタックして、世界全体で関税・非関税障壁を低減してくという事が出来なくなったがゆえに、むしろ二国間で、或いは地域的にこれをしていこうとしている訳ですけれども、韓国に先を越されるとますます日本企業はその分不利な状況に追いやられてしまうかもしれない。

その中であって、最近喧しくなっているのが TPP です。要するに環太平洋自由貿易連合というものを作って行こうではないか、ということで元々の4カ国にアメリカが入り、そして日本が入るかどうか。マレーシアは9番目に入っていますが、それに日本が入るかどうか、ということで大きな問題になっているわけです。日本はもうすでに他の国々との間で大体の事前のすり合わせを終えて、野田政権としては本当に参加するかどうか、政治決断しなければいけないことになっております。

安全保障の問題の観点から、欧州には NATO というものがあります。しかしアジアにはそういった軍事面でのあるいは安全保障面での機構というものが十分に発達していない部分があります。日本の同盟国はどこか？アメリカですね。日本の同盟国はアメリカしかない。唯一の同盟国がアメリカである。したがって日米安保条約というのは、極めて日本にとって重要なライフラインになっているわけです。

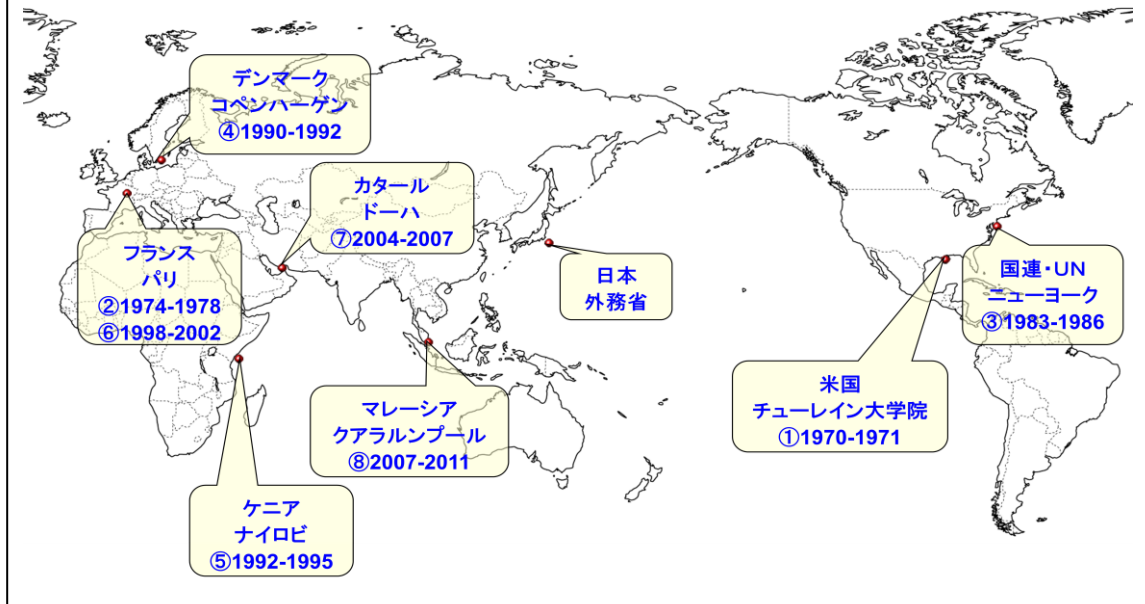
日本が攻撃されたときにアメリカは我が国を守ってくれる。しかし、アメリカが攻撃されたときに我が国はアメリカを救うことはできない。非常におかしな奇妙な形での片務条約であって、我々がアメリカの核の傘を含めて、北朝鮮からの攻撃が仮にあるとすれば、あるいは中国がどんどん軍事費を費やしていろいろなところでの権益を守ろうとした時に、日本がどれだけ対応できるかという、日本一国ではとても対応できない。

そういった意味でも、日米安全保障条約は極めて重要なわけですが、これは日本とアメリカの間でしかないわけです。したがって逆に言うと、アメリカの我が国を含むアジアにおけるいろいろな基地、ベースというものがアジア全体の公共財になっている。アジア全体の地域の安定と安全にとってアメリカのプレゼンスというものが極めて重要な時代になってきている、と言えると思います。

いずれにしても、欧州の状況とアジアの状況というのはそういった部分での大きな違いがある、ということを念頭に置きながら我々としても対処していく必要があります。

今欧州ではユーロ危機のことが言われていて、非常に重要なポイントですが、それは安全保障ではなく、EU体制の金融問題としてのユーロの危機であるわけです。アジアにおいては、欧州で今日ではなかなか起こらないような地域紛争の種というものが現存している。北朝鮮の存在しかり。台湾問題も我々は忘れてはいけません。中国との関係もしかり。それから韓国なり中国との間の領土問題もしかり。そういったようなことを乗り越えて行きながら、経済関係を共栄圏として拡大していきながら、かつ安全保障の問題も克服していかなければならないという、難しい外交交渉というものが現実にあるのが現実だろうと思います。

## 海外生活歴 地球環境問題担当大使 堀江正彦



今日は「フレンズ 帰国生 母の会」主催ということもあり、私がこれまで外務省に入って、どういうところを渡り歩いてきたか、ということをお話ししたいと思います。

私は外務省に入る前にアメリカのチューレーン大学というところに、シカゴに本部のあるロータリー・ファウンデーションからフェローシップを頂いて留学させて頂きました。そのあと外務省に入り、海外研修ができたわけですが、すでにアメリカに留学していたこともあって、やはりもう一つ外国語を勉強したいな、と思いました。当時、というのは1970年代で非常に古い昔ですが、やはり外交にとって重要なのはフランス語だとまだ言われていた時代でした。したがってフランス語を勉強したいと思い、1974年にフランスに研修に行かせて頂いて、2年間フランスの大学で勉強して、そしてそのあと在仏日本大使館に実勤したわけです。

その後また日本に帰ってきて、今度は国連の事務局で国際公務員として明石康国連事務次長の特別補佐官になり、各国の部長、課長、職員の人たちに交じって、国連職員として3年間働かせていただいた。そのあと東京に戻り、次はデンマークに行って2年間在デンマーク日本大使館のナンバー2として働きました。そのあと引き続いてケニアに行って、3年間日本大使館のナンバー2で働きました。

ケニアから日本に戻ってきて、経済協力 ODA の仕事をしましたけれど、防衛庁に出向したのち、今度はカタールという国に行って3年間大使を務め、引き続いてマレーシアで3年7ヶ月大使を務めました。その後日本に戻り、現在は地球環境問題を担当する特命全権大使として働いています。

さて私には2人の娘がおります。ニューヨークに行ったときは次女がセントジョーンズというナーサリー、長女はセントラルスクールという現地校に通い、そこで3年間生活しました。2回目はデンマークで2人ともリュージュズというインターナショナルスクールに通いました。この学校は半分がデンマーク人の子女で半分がインターナショナルで、運動場などお互いの交流が出来るようになっていました。インターナショナルの方は様々な国から来ている子どもたちが在籍し、彼女たちはここで貴重な体験をすることができました。またケニアに行ったときはインターナショナルスクールオブケニアという学校に通わせました。その後は日本で大学に進むこととなります。

私たちは、在外に赴任するときは娘たちを連れて行こうと考えていました。娘たちは二人とも、ニューヨーク、コペンハーゲン、そしてナイロビでの生活経験をしていましたので、大学については、むしろ日本の大学に進ませることにしました。海外経験をして、日本のこともよく知る必要があると考えたわけです。

娘たちは「私たちがニューヨークに行ったときはABCもわからなくて結構苦労したのよ」と今頃になってポロツと言ったりします。とはいえニューヨークでもデンマークでも良い経験をしたといいます。ケニアに行くときはどうしようかと考えましたが、娘たちや家内も含めて「少年ケニア」の世界が好きだったのと動物が好きだったこともあり、アフリカの経験も良いのではないかということで一緒に行く事に決めました。

当時のケニアは複数政党制、民主化の動きが始まったばかりでした。私たちが行ったのは9月でしたが、12月に複数政党制を導入してから初めての大統領選挙行われる予定でした。従ってクーデターが起こるかもしれないという心配があり、そういう緊急事態に我々がどう対応すれば良いのかを考えました。

私が行った当時は、非常に素晴らしい方が駐ケニア大使でした。その下で私がナンバー2として行ったのは緊急連絡網の立ち上げでした。今のようにスマートフォンや携帯電話が無い時代でしたので、ウォークトーカーのような物を使っての連絡です。700人から800人の在邦人をどのようにグループ分けをして全ての人に連絡を行き渡らせることができるのか、それを立ち上げるのが最初の仕事でした。

一方緊急事態が起こったときに大使公邸を開放し、邦人に退避してもらい、1階のどこをどう使うのか、また大使館員を公邸内の交通整理係、旅行者との対応係、公邸内における食料の買い出し係などの役割を決めて、どういう事態になっても対応できるようにしました。それに加えて、ラジオのFM放送を使って、邦人の方々に、大使公邸に備え付けであるマイクからアナウンスをして「今クーデターが起きたので自宅に待機してください」あるいは「できるだけ早いうちに大使公邸に退避してきてください」というようなアナウンスを家庭で聞けるようなシステムを作りました。予行演習を2度、3度と行いスムーズに対応できるような態勢を築きました。3ヶ月間かかりましたが、ようやくうまくできるようになりました。

実際に選挙が行われた時には、アフガニスタンでもそうであったように、ケニアの人々は初めての投票ということもあってお祭り騒ぎでした。国民は投票場の周りを二重、三重に長蛇の列を作り、ちょうどそれは日本の大阪万国博覧会のアメリカ館に長い列をつくり、2、3時間待ってやっと月の石がみられるというのに良く似た感じで、彼らはその列を何の苦もなく近くの人と話しをしながら自分の番を待ち、自分の番が来たら大きな投票用紙に記入をして投票しました。小競り合いなどもほとんどなく、国際監視団の方々も自由かつ公正な選挙が行われたということに満足していました。というわけで、私たちが努力して作った仕組みを起動させるような状況にはなりません。しかし在留邦人の結束が固まり、いつ何時そういう事が起こってもそれに対応できる態勢が整ったという意味で非常に良かったと思います。

ただ町の治安はまだ悪く、食事に招かれたりして夜遅く戻り、「今日もまた無事に帰って来られて良かったね」と家内と話し合う毎日でした。また就寝時には、強盗が入ってきてそれを持って逃げてもらおうと、玄関を入ったところに1～2万円を入れた財布をすぐにわかるように置きました。普段も上等の財布を持たず、1～2万円相当の現地貨幣を入れたビニールの財布をポケットに入れて、ホールドアップにあった時にはそれを持っていってもらうというような対応をして、毎日の無事を喜び合いました。

私たちが3年間の勤務を終えて出発した直後に、日本人学校の校長先生が射殺されるという事件がおきました。また外交官が被害にあう事件も結構起こりました。ケニアだからそういう事件が起こるということではありますが、我々が2度目にフランスで生活していた時には、家内の車は運転中に信号で停車した際に窓ガラスを割られ、運転席の脇においてあったルイ・ヴィトンのハンドバッグは持っていかれました。横の席に大使館員の奥さんがいたにも拘わらず、アルマ橋すぐの目抜き通りのところで赤信号で止まっていたときにそれが起きる。法務省から出向していた書記官の夫人にも同じことが起こる。また大使館に、パスポートを盗られましたとか数十万盗られましたと言って、毎日のように長蛇の列が続きました。そこで私どもは警察に行って、このようなことが起こらないようにしてもらいたい、日本人の観光客が入るホテルの前はきちんとパトロールをしてもらいたい、と何度も抗議を申し入れ善処を促しました。

ある時には私が家内と一緒にゴルフ旅行から帰ってきた時、キーを中に入れたままアパートの前で車を停めて、ゴルフバッグを出している間に賊が車の中に入って、そのまま乗っ取られてしまいました。ゴルフバッグこそ入っていませんでしたが、賞品のワインや遠い旅行だったので旅行バッグなど全部持っていかれてしまいました。ひと月半くらいしてから車がブローニュの森で見つかりました。このように一台目のBMWは盗られ、二台目のBMWは窓を割られたわけです。

つまり、ケニアは危険で欧米は危険ではないということではなく、みなさんご存知のように世界あらゆるところが危険なのです。日本は非常に安全なところで、安心して暮らせるがゆえに日ごろから注意しない。ですから日本人は悪い人にとっては最大のカモですね。



本当にやりやすい。また、すぐに心を許してしまう。甘い言葉で誘うとみんなすぐにそれに乗ってしまって、何度も犠牲者になるということが繰り返し続くのです。ですから、大使館に駆け込む人の数は増えてこそ、減ることはないのです。

これが、日本が居心地の良い国である一つの理由で、日本がなかなか国際化出来ないのそこにも原因があるのではないかと思います。そのようなケニアに娘を連れていくというのは、躊躇しないと言えば嘘ですが、そういうところでも溶け込んでそれなりの経験をするというのが、今だから言えることかもしれませんが、良い経験になったと思います。

マレーシアにいた時、娘はもう巣立っていましたが、マレーシアの日本人学校の卒業式や入学式や運動会には欠かさず出席して挨拶をしていました。その時に申し上げていたのは、「あなた方が今日ここにいるというのは、かけがえのない貴重な経験だと思う。できるだけ一生懸命勉強して欲しいけれど、現地の人たちとの交流を何らかの形で持てるように、ご両親方も考えていただきたいし、君たちもできればマレーシアの同じ年頃の子どもたちと交流ができるような、あるいは友達になれるような努力をして欲しい」という話をしました。

それにつけても、私が申し上げたいのは、海外で勉強している子どもたちの目の輝きは違いますね。日本人学校でも現地校でも海外に出ているお子さんの目の輝きは違う。何がそうさせるかというのは、分析されたら面白いかと思います。やはり子どもは伸び伸び育ち、また家庭での結びつき絆が在外に出るとより強くなる。日本にいと、お父さんは未だに働き蜂で残業もあり、家庭を大事に考えることができない。在外に出るとセキュリティーの観点からも気を付けなければいけない。お父さんも日本にいた頃より早く帰ってくる。そこでお父さん、お母さんとの関係も日本にいるよりも強くなる。

このような観点からも、みなさんが在外に出られるときには是非、家族揃って行っていただきたい。そうすることで、子どもたちの異文化経験にもなり、それが成人した時の財産になること疑いないと思います。

更に、英語力や現地語の力がつけば、怖いものはありません。いま何が起こっているかという、やはり英語力をつけなければいけない、また異文化体験をしなければいけないと、東京大学の濱田総長がいろいろ新しいことをやって、旋風を巻き起こしていらっしゃる。それも、日本が今までのやり方が良いと思っずずっとやってきたことが、そうではないのだと、変革が求められている時代であるということだと思えます。

本日配布しました中に、朝日新聞の経済気象台の小さな記事があります。遠雷さんという経済界の名士が書かれたものです。「海外に行けば大化けする海外駐在員」と書いています。海外に行った経験は、国内でやっていることよりもはるかに良い経験ができる。海外では自分が全てマネージして自分で判断していかなくてはならないことが相当増えるということです。そのような意味でも、ビジネスマンにとっても海外経験は重要であると思えます。

外交の世界でも、在アメリカ大使館や在中国大使館では館員が 100 人以上いますが、多

くは 15~25 人位の規模の大使館が普通です。つまり、若手の一等書記官なり二等書記官で行っても、経済班長・政務班長を任されるわけです。すると、日常、相手国の大臣相手に仕事をしなければならなくなるわけです。日本の企業であれば、社長・副社長・部長が対応することを海外では平社員がやるということです。

大使館でも同じように平書記官でやらなくてはならない。それだけに、やりがいがあり、非常に面白い。ですから、私は「若い人たちには、早くに在外に出て大使館員として在留邦人の保護も含めて頑張らなくてははいけない」と言っているのです。「スーダンやリビアのような危険なところも含めて、最大限の注意を払いながら、そこに行くことに物怖じをしない精神で行ってもらいたい」と話しております。

ぜひ、皆さま方も機会があれば世界に飛躍していただきたいと思います。  
私の頂いた時間よりも長くなってしまいました。本日は、ご清聴ありがとうございました。

## 質疑応答

Q：企業で渉外担当をしております。

大変重要なトピックス、それから最後のお話は大使自身のご経験を踏まえたアドバイスが、海外によく行く私にとっては参考になり大変ありがたいと思いました。

私どもも現地法人としてやっていますが、実際に携わってみますと…デリケートなエリアで表現が難しいのですが…従業員採用の試験をしてみますと、出来るのが中華系の方という実態がありまして、ただ一方でマレー系の方々も大変重要な責任と立場がありますので、私どもとしては色々と考えてアプローチしていかなくてはならないと思います。そこで、今はマレー系の人たちを優遇しなくてはならないとのことですが、今後マレーシア政府の政策がこのような課題に対してどのように変わっていくのか、日本の企業がどのようにアプローチしたらよいか、是非アドバイスいただきたい。

A：よくマレーシアの事情をご存じの方で、まさにポイントを突くご質問だと思います。冒頭申し上げた通り多文化・多人種・多宗教の国ですが、土地の子でありますマレー系の人々が優遇されています。ご存知の通り、シンガポールはもともとマレーシアの一部でしたが、シンガポールは自分たちでやっていくということで分離しました。マレーシアでは、完全に平等にしたときには、経済的にもそうですが、中華系の人たちが優勢になりかねないので、政府としては土地の子を優遇する政策をとっています。

現地で企業経営をしている人は、マレー系・中華系・インド系をどのように扱うかでご苦労があることと思います。私に言わせると、あまり神経をとがらせなくても能力主義でやっていくと良いと思います。能力主義でやっていくと、仮に中華系の人の方が優秀であっても、それゆえに社内で反乱が起こることはないと思います。マレー系にはイスラムの

教えがありますから、一日に何回かお祈りの場や時間が必要です。経営者としては、こうした宗教ごとの考えを尊重していく必要があると思います。

一つのケースですが、このマレーシア半島の東海岸の北側に、コタバルというところがあります。ここは真珠湾攻撃よりも先に、日本軍が最初に攻め入ったところです。このコタバルのあるケランタン州というところは、マレーシアの中でも最もイスラム的な州ですが、ここに進出しているロームワコーという会社があります。このロームワコーという会社は、京都に本部のあるローム社と提携している企業で、岡山にある半導体などの製造会社です。もともとはクアラルンプールの近くにあったのですが、そこでの人員確保が難しくなり、ある時決断してコタバルに移した。ここはほとんどがマレー系の人たちですので、イスラムのことを念頭に置きながら事業経営をしておられ、成功を収められています。

マレー系、中華系、インド系の人たちと相和していかなくてはいけない。そういった苦勞をされている日本の現地法人の方も多いたと思います。国の成り立ちというのをすっぱり飲み込んで、その上で利益を生んでいく必要がある。現地の日本人といつも二人三脚でやっていたのは、マレー系の人たちは今やシンガポールに次いで所得が上がっているから、単純労働者をインドネシアから入れる必要がある。しかしマレーシア政府がなかなか「うん」と言ってくれなくて、首相に掛け合い、副首相に掛け合って、戦略的産業分野においては外国人労働者を雇えるようにしてもらいました。

しかし私が帰国してからはミャンマー、バングラデッシュ、インドネシアなど周辺の外国人労働者の扱いが更に難しくなった様です。違法労働者の問題もあり、日本企業が外に出ていくには、その国その国の特殊な事情を考慮しなくてはいけないと思います。

最後に一つだけ言い残した話があります。マレーシアには日本人が1万人います。韓国人は2万人います。2万人いるうちの1万人は、わが日本人の1万人と多かれ少なかれ同じ構成でビジネスマンが中心です。

ではマレーシアにいるあと1万人の韓国人は誰でしょう？この人たちの半分は中学生・高校生です。何をしに来ているか？彼らは英語を勉強しに来ている。では残りの5千人は誰か？彼らのお母さんですね。韓国に「母の会」があるかどうか分かりませんが、韓国のお父さんは働く人、お母さんは息子や娘をマレーシアに連れて行って英語をペラペラにさせる人なのです。今、韓国では英語ができないと一流会社に行けません。お金持ちの韓国の家庭は、子弟を欧米に行かせます。中流社会の家庭ではそこまでの余裕はないが、マレーシアなら物価が安いので、子どもを連れてやっていける。

この現象はマレーシアのみならず、フィリピンでも見られます。それは英語力をつけさせる国として最適と認識されているからです。その数千の若い人たちがマレーシアに来て勉強し、上流階級の人たちは欧米の一流校で勉強する。そういう韓国人が今日のサムソンの力であり、LGの力であり、活力になっているのです。

国際社会でも同じです。中国の人たち、韓国の人たちは英語が上手くなった。だから、私は、若い人外交官たちに、「外交官として恥ずかしくないように英語力をつけろ。フランス語力をつけろ。タイ語力をつけろ。マレーシア語力をつけろ。語学力をつけないと、日本はこれから生きていけない」と檄を飛ばしています。

## 第2部

「今、伝えたい、海外でいざという時何を・・・？」

～赴任家族の体験から～

### 講演者 プロフィール

#### 荒木 圭子

1996年（平成8年）～ 2005年（平成17年） タイ王国 バンコク在住

2005年（平成17年） 帰国

2006年（平成18年）～フレンズの活動に参加

#### 石川 清美

1992年（平成4年）～ 1998年（平成10年） アメリカ合衆国 ペンシルバニア州  
ピッツバーグ在住

1995年（平成10年）～ 2005年（平成17年） 中華人民共和国 上海在住

2005年（平成17年） 帰国

2005年（平成17年）～フレンズの活動に参加

## タイにおける危機管理

荒木 圭子

私は、6歳と3歳の2人の子どもを連れて、1996年から8年半タイのバンコクに滞在いたしました。私がタイで体験した危機はタイバーツの暴落とインド洋大津波です。

タイバーツ暴落では、主人が会社の状況を話してくれ、いつ帰国になっても良いように準備をするよう言われました。また、現地従業員の人員カットなど行った場合は、反感を買うことがあるので行動や言動に気を付けていました。

インド洋大津波は、バンコク日本人学校の生徒一人とそのお父様、先生の奥様を失いました。大津波のような突然の災害時にはその場にいる現地の方の助けを得るほかありません。流されていたところを私の知人家族はタイ人に命がけで助けられました。その人が、「残ったのは着ていた水着と結婚指輪、そして妻と二人の子どもたちだけだった。」と言ったとおり、まさに守らなければいけなかったのは命のみです。助け出された後、その方はタイ語が話せたので、タイ人に頼まれ再び海岸に戻り、観光客に英語で避難勧告のアナウンスをしています。皆、国を超えて命がけで協力していました。

私が経験した危機はこの2点のみですが、帰国後タイには色々な事が起こりました。反政府市民団体の大規模デモ活動による新国際空港の閉鎖もありました。これは、受験生にとっては受験時期だったので大打撃でした。受験が受けられなかったり、車で隣の国に行ってそこから帰国しようとしたり、パニック状態に陥りました。

次に今回の50年に1度と言われている大洪水についてお話しさせていただきます。私がタイに赴任した頃はまだまだ水はけが悪くバンコク市内の外国人が多く住む地区にもよく水が出ていましたので、前任者から念の為ゴムボートを持っていた方が良いとアドバイスを受けました。前任者の頃には道路に移動手段のため船が出たことがあるそうです。ただ、私たちの赴任中にタイ政府が市内の排水管の排水能力を順次高めていったため、幸いなことにゴムボートは活躍しないですみました。その後、タイは日に日に発展し、町の風景も変わってきていました。それなのに、去年の洪水のとき、バンコクまで被害が及ぶかもしれないと報道されたのを聞いて驚きました。

バンコクは未だにスコールと呼ばれる大雨で水が溢れていますが、私の知っている中では北部から水が押し寄せてくる事はありませんでした。北部から水が流れてくるかもしれないという事態には赴任されている方たちはさぞかし驚いたことと思います。当時どんな

状況だったのか、8人の方に質問してみました。

まず、危機感を持った時期は、バンコク日本人学校が2度目の休校を決めた頃とその約1週間後の大潮でバンコクが浸水すると言われた頃に集中しています。皆、ありとあらゆる所から情報を収集し、水・インスタント食品などを確保していました。

乳児のいる家庭は、赤ちゃんのミルクのことや衛生面に対する心配、また万が一の時、子どもを病院へ連れて行けるのか、病院が対応できるかの心配をしていました。幼児及び小学生児童を持った家庭は、飲料水の確保の心配をしていました。つまり、飲み水のために付けていた浄水器の処理能力は大丈夫か、停電によって浄水器が動かなくなるのではないかなどの不安です。何とか安全な水を確保しようとしていたので、ペットボトルの水が品薄になってきたときには危機を感じていました。

中学生のいる家庭は、学校の出席日数不足によって受験が不利になってしまわないか、受験ができないのではないかなどの心配をしていました。反対にインター校の家庭は、学校の心配はあまりなかったようです。というのは、日本人学校が休校の間も、市内から離れていたインター校は自主的な登校が許されていたからです。

この大洪水により、危機が迫ってくると感じ始めたあたりから、各家族では避難についてどうするか相談していたと思います。その時の決断に会社の判断と日本人学校の判断が大きく関わってきます。日本人学校が重視したのは、子どもたちをどう守るかの1点につきましたと思います。現在の校長先生とメールをする機会がありましたが、日本人学校の判断が大きく企業の判断にも影響を及ぼすことがあるという責任を感じたとのことでした。実際、日本への一時帰国を自粛するよう指示を出していましたが、日本人学校の判断を受けて帰国許可を出した会社もあったそうです。

企業の対応は大きく分けて4つにわかれます。

- 1つ目は、家族のみ本帰国を決定した企業
  - 2つ目は、家族のみ一時帰国指示を出した企業
  - 3つ目は、各家庭に判断を委ねた企業
- 最後に、全員本帰国の決断をした企業でした。

家族のみ本帰国させることにした企業は、赴任家族の子どもの年齢が低く、疫病が流行ってからは全てが手遅れになるという判断からでした。大半の企業は家族のみで、日本に一時帰国をするように指示を出しました。おそらく、企業も大洪水の行方が分からず混乱していたと思います。そこで、とりあえず、家族だけでも一時帰国をするよう指示を出して、洪水についての情報収集に専念したと思われます。また、全員本帰国を決断した企

業は、企業自身が洪水によって経営に打撃を受けてしまい会社ごとタイから撤退せざるをえない状況だったと思います。

バンコク日本人学校が休校になった後は、80%の生徒が日本に帰国したそうです。校長先生がおっしゃるとおり、学校の判断が、企業の判断や日本人家庭の行動に大きな影響を及ぼしたと言えます。

一方、バンコクの南東 100 キロの地点にあるもう一つの日本人学校に通っている家庭には帰国指示は出されませんでした。洪水地点からバンコクよりも遠く離れているので、洪水は来ないだろうと思われたからです。そのため、バンコク日本人学校から一時的にこの学校に避難してきた家族も多くありました。危機が訪れたときの対応は、企業の規模・家族の状況・住んでいる地域によってそれぞれ異なっていました。

今回の大洪水は、バンコクに被害が及ぶまでに時間的猶予があったので、各企業・各家庭で考え、その結果それぞれが違った結論を出しています。守らなければいけないものは、父親は会社、母親は子供の健康・学校問題と広範囲でした。

洪水の時の話の中で印象的な事ごらをお伝えしたいと思います。情報が錯綜する中、外地で日本人が正確な情報を得るのは大変な事です。今回の洪水では、会社によっては、タイ人の奥様がタイのニュースを毎日社内メールで配信してくださったところもあります。タイの情報が正しいかどうかは別として、一つでも多くの情報を得てその中で自分たちなりに判断していこうとしている様子が見られます。この社内メールは大好評だったようです。多くの方たちは、言葉が分からず地図もないタイのニュースは洪水がどこまで来ているか分からないで困ったとのことでした。

反対に NHK の地図付きのニュースは頼りになったとのことでした。それでも、不安で毎日タイのニュースを言葉が分からないながらも聞いていたという家庭が多くありました。

また、各会社とも情報を捕らえにくい中、大企業ならいち早く情報を得られるだろうと考えていた人も多かったそうです。しかし残念ながら大企業でさえも、事態を予測することが出来ずに水没し、近隣の企業も大企業の動きに注目しているうちに対処が遅れてしまい、工場と一緒に水没してしまったというケースもあったそうです。近隣の会社同志は会社を越え、国を超えて、協力し合い情報収集しなければいけないのかもしれないと思いました。

大洪水から4ヶ月が経ったいま、タイに赴任している方はタイ政府に望むことがあるそうです。今後どのように治水工事を進めるのか、長期にわたった対応、その情報公開が欲



しいということです。そして日本大使館や会社はその情報を得たら各家庭に伝えて欲しいということでした。大洪水だけでなく、いつの時代もどこの国でも大変な出来事が起きた後は、反省すべき事、改善すべき事が沢山出てきます。事態が収まった後も忘れるのではなく、常に対策を考え、情報を提供して欲しいという事ではないでしょうか？

一方、会社対応についての不満はなく、むしろ満足していると聞いています。赴任家族は、会社から十分な説明さえなされていれば、夫の会社、子どもの通っている学校を最後は信じて行動すると思います。反面、受験などの特殊な事情を持っている方の意見や希望を会社が聞いてくださることも大事な事かと思えます。空港閉鎖の時に家族全員本帰国の指示を出しながらも、受験生のいる家庭は相談を経てバンコクに残ることを認めている会社もあります。もし、その時によって希望が叶わなくても、十分に会社の判断の理由が説明されていれば、信じて行動できると思います。

私の小さな経験・小さなつながりから得た情報ですが今日お集まり頂いた方たちの何かの役に立てれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

## 中国の危機管理

石川 清美

私は、1992年に1才の娘を連れてアメリカに赴任し、6年半の駐在の後、1998年、日本に帰国することなく小学2年生の娘とアメリカで生まれた2才の息子を連れて上海に異動いたしました。そして、6年半上海に駐在し、2005年に13年間の海外生活を終えて帰国いたしました。

今日は、中国での危機管理についてお話させていただきますが、中国での私の駐在経験は上海だけですので、フレンズスタッフで北京と大連に駐在経験のあるスタッフ、上海と香港駐在経験のあるスタッフ、それに私の3人の体験から感じたことをもとに、皆さまにメッセージをお伝えしたいと思います。

駐在中に体験致しました一番大きな出来事といたしますと、皆さまも記憶におありかと思いますが「SARS」です。大塚は香港、私は上海に駐在中のことでした。SARSについての詳細はここでは割愛させていただきますが、先ほど受付にてお渡ししました私どもで発行しております「フレンズだより 57号」にスタッフの体験談が掲載されておりますので、お読みいただけたらと思います。

どの国に赴任されても同じかと思いますが、このような突発的なことが起きた時、大使館や領事館から企業を通じて駐在員家族に指示が出されます。SARSの時も同様でした。ですから、最終的に私たち家族は、企業からの支持によって行動を起こすことになりました。

企業からの指示は大きく分けて3つに分かれたのではないかと思います。

1つ目は、家族全員が日本に帰国しなければいけない。

2つ目は、帰国しなければいけないが、やむ終えない理由で現地に残ることを希望し認められた場合はその家庭の責任とする。

3つ目は、各家庭の判断とする、というものでした。

ただし、これは都市によってSARSの広がりや大きさが違いましたので全く同じような対応ではなかったことを付け足しておきます。

当時香港にいたスタッフは子どもたちの学校の都合に合わせて香港にしばらく残り、その後2つ目の原則帰国の指示を受けて帰国しました。私は3つ目の家庭の判断という指示を受けましたので、家族の話し合いで上海に残り日本には帰国しませんでした。

このようなことが起きた時に、中国のそれぞれの都市に駐在していた私たち3人が同様に感じたことがあります。

まず、日本の報道を見てとても驚きました。自分たちの住んでいるところが大変なことになっていると報道されていたのです。日本での報道は現地で起こっていること全てを報道しているわけではなく、一部が過剰報道していたように感じました。

私の住んでいました上海について言えば、必要以上に人混みに出ないようにしたり、外出から帰ったらうがい手洗いをしたりするなど気をつけてはおりましたが、子どもたちは通常通り日本人学校に通い、私も買い物に出かけるなど特に生活に変わりはありませんでした。

このようなことから私たちは、SARS だけではなく現地において突発的な事件が起こったときに、それに対して自分たちがどうすべきかをあわてず冷静に判断することがとても大事だと感じました。特に、駐在間もない家族の場合には的確に判断することはとても難しいと思いますので、日本へ帰国しなければならない、あるいは状況をみて待機するなど企業から家族に対しての指示をきちんとお伝えいただけると大変ありがたいと感じました。

これに付け加えてお伝えしたいことがあります。

先ほど、SARS による日本への帰国指示のお話をさせていただきましたが、このとき、現地に残った家族よりも企業からの指示によってやむをえず帰国せざるをえなかった家族の方が大変だったというのが現実だったように思われます。フレンズだよりに掲載されておりますが、大塚の場合は成田で取材のマスコミに囲まれ子どもたちが怖い思いを体験しました。帰国した家庭は帰国後 10 日間の自宅待機を余儀なくされ、その後会社出勤や学校への登校の許可がでるという状況でした。日本の滞在先では近所の方や一時登校した学校からもあまり歓迎されない、どちらかといえば肩身の狭い滞在をしていた方も少なくなかったようです。実際、お子さまの登校を拒否された学校があったり、学校でいじめにあったりということもあったようでした。日本に住居や滞在可能なご実家がないためホテル住まいをしなければならないご家庭もあったと聞いております。

今後、もしこのようなことが起き企業から帰国の指示をだされることがありました時には、対応していただける窓口を持っていただき、日本に滞在する家のないご家庭に対しましては、ホテルの確保をしていただけるなどの対応をお願いできましたら大変ありがたいと思います。

その他に中国といいますと皆さまの頭に浮かぶのは反日行動かと思えます。

私は、上海での 6 年半で現地の方から反日感情を経験したことはありません。しかし、政治の中心である北京では、反日行動が起きたときには嫌な思いをした日本人の方が少なからずいたと聞いております。ただ、中国人全員がこうした感情を持っているわけではありませんから、SARS 同様、反日デモが行われている周辺には近づかないよう気を付ければ事件に巻き込まれることはありません。それと、現地に赴任している家族は、日本から中

国に派遣されているのだという認識をしっかりと持ち、特に中国国内や日本において反日行動が起きた場合には、日本人であることを示す行動や言動を慎むように気をつけることが大切だと感じました。

このような突発的なことはいつ起こるかわかりません。日本でも昨年の大震災の体験によって、防災グッズを常備される方が多くなったのではいかと思いますが、現地におきましても、急遽日本に帰国するなどの時に備えまして、スーツケースの中にパスポートと一緒に是非備えておいていただきたいものがあります。日本に帰国するために必要な家族分の現金です。国の事情でとっさの時に銀行に行けなかったり、カードが使えなかったりすることがありますので、これは必要かと思えます。その他に大使館や領事館、会社の連絡先を書いたメモも常に一緒に置いておくとういかに思えます。さらに、思い出の写真の USB やメモリーカード、子どもの成績表などもスーツケースに入れ、緊急持ち出しリストを用意しておくとういかに思えます。

私の主人の会社の場合には、現地の会社に日本人家族をサポートしてくださる日本語の堪能な現地人のスタッフがいてくださいました。滞在中は常にその方の連絡先を持ち、また電話の横には 24 時間対応の病院の連絡先を貼っておりました。中国は外国人向けの病院とホテル以外は英語がほとんど通じない国です。主人たちは出張でいないことも多いです。何か困ったときには中国語力がかかなり必要になりますので、現地の人事担当者の中にサポートをしてくださる日本語のできるスタッフの方がいてくださったことは、私たち駐在員家族にとってはとっても心強かったです。

ここからは少し生活に密着したお話をさせていただきたいと思えます。

中国に赴任される方から相談を受けることの 1 つに病院があります。都市には日本人医師や日本語のできる中国人医師が常駐している外国人向けの病院があり、英語あるいは日本語で対応をしていただけましたが、外国人向けの病院がない地域もたくさんあります。今後、中国の地方都市への赴任がどんどん増えていくのではないかと思います。現地の医療技術は決して良いとは言えません。外国人向けの病院がないところに赴任された場合に、大きな病気や怪我の治療についてはなるべく日本に帰国し治療を受けられるように、また外国人向けの病院がある都市におきましても、手術を要する場合にはできるだけ日本に帰国して施術できるようご配慮をしていただけたらと思えます。とは言いましても、通常の軽い病気や怪我に対しての治療は問題ありませんし、私たちが駐在していました都市では日本人も現地で出産のできる環境もできておりましたので安心していただけたらと思えます。

これから赴任される方に必ずお話しする日常生活で気をつけていただきたいことがあります。

す。中国の交通事情です。たくさん車とバイクと自転車が、交通ルールがないように走っている映像をテレビなどで目にしたことがあるかと思いますが、あの状況はまさに本当です。信号があっても守らなかったり、横入りしたりするのは通常のことですし、大きな通りを横断するときには手前の車線の切れたところで一車線ずつセンターラインまで渡り、大通りの真ん中に立って反対側の車線が切れたところでまた一車線ずつ向こう側に渡りきるというのが通常です。横断歩道を歩いていても車が止まることもなく突っ込んでくることもあります。マンションの敷地の外は小さな子どもは保護者なしで出すことはしないで、子どもを連れて出るときも必ず手をつないで歩くことは心がけていただきたいと思います。たぶん、実際行かれてみたら私が言うまでもなく、とても怖くて子どもは一人で歩かせられないと思います。

現地での危機管理についていろいろとお話をさせていただきましたが、中国の駐在経験者の私たちから是非お伝えしたいことがあります。

私はアメリカと上海に駐在経験をしましたがその時に感じたことがありました。アメリカに赴任する前に周りの方から「いいわね～」と言われました。その後上海に行くことになった時には、と言いますとご想像がつかますよね・・・。「大変ね～」と言われました。たぶん、中国に限らず先進国以外に行かれた方は経験がおありの方もいらっしゃるのではないかと思います。実際私自身も一度も行ったことがない国で、報道で知る限りでは「子どもを連れて行って住めるのかしら」と思っておりましたし、日本の両親も心配をしたようです。

驚くような事件や事故を起こしたり食べ物や衛生面に問題が起こったりと中国に対するイメージというのは決して良いものではないのが現実ですからしょうがないですね。でも、駐在していました私たちは、本当に充実した楽しい生活を送っておりました。交通事情はよくありませんが気を付ければ大丈夫です。

衛生面でいえば、水道水は飲めませんので蒸留水を買ったり、蛇口に浄水器を付けたりし、食材は日本や欧米の食料品店で買い物をして特に問題はありませんでした。

治安の面でいえば他の国よりかなり良いのではないかと思います。中国では外国人に対して事件を起こした場合には即、極刑になると聞いておりましたので、そういう点では私たちは守られていると感じて安心して生活しておりました。

企業の皆さまも、これから赴任されるご家族の方には現地で気をつけることをお伝えいただくと同時に是非「治安の良い、安全な国なので楽しい生活を送れます」ということもお伝えいただけたら、駐在経験をもつ私たちも大変嬉しく思います。

最後に、海外駐在にともない私ども家族に起こりました大きな体験をお話したいと思

ます。

冒頭でお話しましたとおり、私の家族は13年の海外駐在を終えて帰国いたしました。子どもたちはそれぞれ帰国生として私立の小・中学校に編入することができ、初めての日本の学校生活を楽しくスタート致しました。しかし、日本の生活も落ち着いた半年後に主人は上海に再赴任となり、子どもたちの学校などを考え、話し合いをして単身赴任いたしました。上海は食事など生活においても単身者には困らない都市でもあり、安心しておりました。

ところが、単身赴任して1年2ヶ月後、突然1本の電話が入りました。主人が単身先のマンションで亡くなったとの連絡でした。突然死でした。前日まで日本に出張に来ていた主人を朝見送り、その翌日の夜中の出来事でした。

翌日現地に飛び、対面した後は、警察、マンションの片付け、書類受け取り、最後に現地での葬儀も済ませ、一緒に帰国...と時間に追われた現地での数日間、そして帰国後は成田から葬儀所に向かい葬儀の準備をして...という突然、何が起こったのかわからない中で目まぐるしい日々でした。

1本の電話から始まり、葬儀や主人の退社に関わる手続きまで会社の皆さまにはお力になっていただけましたことに大変感謝しております。主人は毎年人間ドックを受け、健康優良とはいえませんが再検査の必要などがあるところもなく、タバコも吸わない、飲酒も付き合い程度で自宅では全く飲まない人でした。ただ、度々の中国国内の出張、週末を使っの毎月の日本出張と大変多忙でした。

日本人サラリーマンが一番働き盛りといわれる40代という年齢、私も主人の身体を心配しながらも諦めていたところがあったのかもしれませんが。男性はとかく多少具合が悪くても休暇をとることはないでしょう。ましてや病院で検査をするなどよほどのことがない限りしないと思います。海外、特にアジアに駐在するご主人たちは、現地の言葉でないと通じない、また通常の生活において常識が通じないストレスに加え、仕事においては現地スタッフとの間でかなりのストレスが溜まるのではないかと感じます。

主人のことは、全く予想もしなかった突然ふりかかった出来事でした。しかしこれほどのご家庭に起こってもおかしくないことではないかと思えます。

企業関係者の皆さま、このようなことが本当に起こることがあるのだということをわかってください。駐在されている社員の皆さまの体調、疲れ、精神的ストレスなどについてご本人と度々お話をすることで、何か訴えることが少しでもあった時には、身体を休める、必要があれば検査をする、ご家族と相談をするなど、是非早めに対処して差し上げていただけたらと強く願っております。

私も子どもたちも、主人のおかげで海外生活というとても貴重な経験をする事ができました。大変なことも多かったですが素敵な経験がたくさんできました。感謝しています。辛い思い出の都市となってしまった上海ですが、私も子どもたちも決して嫌いにはなっていません。家族で6年半過ごした思い出がたくさんある大切な駐在都市です。

本日はご参加をいただきまして大変ありがとうございました。

限られた時間の中で上手にお伝えすることができなかつたかと思いますが、私の話の中で、少しでも皆さまのお力になれることがありましたら大変嬉しく思っております。

私共「フレンズ 帰国生 母の会」一同、各国での滞在経験を生かし、ボランティア活動ではありますが皆様のお力になれるよう頑張っております。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

## 質疑応答

Q: 今お話を聞かせていただいて、海外で危機に直面した時も現地の言葉がわからないといういろいろ大変だなと感じましたが、お二人の方は赴任前に現地の言葉をどの程度習得されて行かれたかお聞かせください。

A 荒木: 私は日本では何も勉強せずに、3歳と6歳の娘を連れて赴任しましたが、バンコクは英語が全く通じない国なので、タイ語は必要でした。タイではどんなに早朝でも家庭教師が来てくれました。3歳の娘がいて外に出られない状態でしたので、私と主人は朝5時から6時、6時から7時に家庭教師に来てもらってタイ語を習得しました。

A 石川: 中国でも上海だけのお話になってしまうのですが、やはり先ほど少しお話ししましたが、英語は殆ど通じない国です。私はアメリカから直接の移動でしたし、主人もアジアに行くとは全く思っていなかったので、全く勉強もせずに中国に行きました。

私は6年半いましたが、行ったときと帰る時とではご存知のとおり成長が激しい国ですので、全く状況が違いました。日本の食料品店や欧米の食料品店、スーパーマーケットで買い物をし、日本人学校へ通い、美容室も日本語の通じる方がいたり、病院にも日本語か英語の通じる外国人向けの病院に行けば、英語と日本語で何とかなってしまうことはあります。しかし、地下鉄は便利なところしか通っていませんので、通常出歩くのは全てタクシーです。そしてタクシーの運転手さんは英語を全く話しませんのでその際に必要だったり、またお買い物に行くときに市場で必要だったり、ご家庭によってはお手伝いさん...アイさんと呼んでいるのですが...アイさんとお話しするには中国語ですか

ら、その辺が一番使います。ご主人は当然会社で必要な言葉は出てくると思いますが、家族の場合は現地を楽しむために必要だったり、また中国の習いごと、中国のスポーツ系であったり、音楽系であったり、お茶を習ったりするのであれば中国語を学びながらお稽古もできる、「一石二鳥」という感じで奥様たち、お子様たちは学んだりされる方が多いと思います。基本的には家庭教師、もしくは中国語をお勉強する学校が大学の中にあったり、いわゆる英会話スクールといった感じで、毎日授業があるところから週に一回だったり、奥様向けの日常会話の学校であったり、みなさん少なからず生活に必要で、赴任してからは必ず数年間はお勉強されていたかと思います。私も最初は子どもが小さかったので家庭教師をつけたり、学校に通ったりして勉強しておりました。

Q：バンコクで生活する上で一つだけ気を付けることがあれば、教えてください。

A 荒木:バンコクも中国と同じで交通事故が多い国です。運転手を使う場合があるのですが、その運転手に居眠り運転をしないように、スピードを出しすぎないように教育することで、事故のない快適なバンコク生活が送れると思います。



## フレンズの活動のご案内

松尾 ひろみ

現在、世界中のどの地域におきましても新型ウィルスの発生や、自然災害、テロ・暴動などいつ起こるか分からない状況にあります。海外でいざ非常事態に遭遇した場合に慌てないように是非、企業の皆様には、緊急時の連絡方法や社員の行動規範などをまとめましたマニュアルを配布して頂ければ助かります。必要であれば、訓練などを実施されるのも良いことではないでしょうか。

『何よりも“事が起きた時に”冷静に行動できることが身の安全に繋がるからです』

また非常事態が発生した場合のマスコミ報道の過熱や情報の混乱から、現地法人と日本本社との間に、意識のズレが生じることもありますので、ホットラインの確保など密な連絡と連携を取って頂ければと思います。今後、新興国に赴かれる機会も多くなると思いますが、インフラはじめ、法律なども、きちんと整備されていない状態の中での仕事や生活には、相当なストレスが掛かると想像されます。

駐在員とその家族の心身の安定のために、現地文化や習慣をよく理解する現地スタッフの配置や、相談窓口の設置を検討して頂けましたら幸いです。特に相談窓口の設置につきましては、昨今、個人情報保護の観点より、相談者側はパーソナルな情報を会社側に明かしたくない、又、会社側も社員のパーソナルな話にタッチするのを避けるという傾向もあるようです。そのような場合には外部機関に委託するのもひとつの手段だと思えます。どうぞ宜しくお願い致します。

それでは引き続きまして、ここからは私ども「フレンズ 帰国生 母の会」の活動について少しお話させていただきます。

先程からの話にもございますように、世界では、さまざまな非常事態に、いつ遭遇してもおかしくない状況にあります。フレンズでは、これから海外にご赴任される方々が少しでも安心して渡航できますように毎月、東京海上日動火災保険メディカルサービス株式会社主催の、『海外赴任前セミナー』に於きまして、個別相談を受け持っております。個別相談では、私どもフレンズの、現地生活 経験者が、様々なアドバイスをさせて頂いております。海外赴任が決まりましたら、まず赴任地を正しく理解して頂くことが大切になります。現地を理解するのに手助けとなる情報は大きく 5 つに分けられます。

第一が自然条件です—これは現地の気候風土です。年間降水量や気温の状況、寒冷地や亜

熱帯などそれぞれの気候にあった準備や工夫が必要になります。

第二が衛生医療条件です—これは現地の公衆衛生状況の確認です。伝染病・感染症の流行が発生している、又は今後発生する可能性があるかどうか、食中毒の発生状況や飲料水の安全性など、また現地の医療体制・救急時の対応なども知っておく必要があります。

第三が政治社会条件です—これは現地というより赴任される国の政治体制や法律、宗教による規制事項などがあるかどうかを確認しておく必要があります。

第四が文化条件です—これは現地社会を構成する民族・地域・信仰・道徳などから来る慣習への理解です。現地の方々が大切にしている文化・慣習などを尊重し理解することが必要です。

そして五番目が生活・教育条件です—これは現地での衣・食・住について、一般的なライフスタイルを把握しておく必要があります。また現地教育制度の確認も併せて必要です。

現地着任後の無用なトラブルを避けるためにも、このような事柄について事前に把握しておくことが、大切になります。現在はネット社会といわれ、簡単にご自宅のパソコンから世界の情報を入手することが出来ますが、全てそれが正しい情報とは限りません。いかに正しい情報を集めるかが課題となります。

『個別相談』では、主に先程の5番目の生活・教育条件につきまして、現地生活を経験致しました、私どものスタッフが、実際の生活で困ったこと・学習したこと・また生活のヒントになるようなことを、体験に基づきお話させて頂いており、できるだけ新しく正確なアドバイスが出来きますように心がけております。

また現地生活経験者が個別にアドバイスを差し上げる個別相談のほか、地域別や国別のセミナーにも対応しております。個別相談やセミナーでは、私どもの経験を元にまとめました、『海外赴任の手引き』をお配りしています。

具体的な手引きの内容を少し紹介させていただきますと…。

非常時に、駐在員の家族が落ち着いて行動できますよう『海外生活での危機管理』をはじめ、日々の生活の中での留意事項や、日常の安全対策、また異言語・異文化環境下で、心身の安定を図れますよう『海外生活のメンタルヘルス』について、お子様を帯同されるご家族の一番の心配である『現地での教育について』など、全て現地生活を経験した立場でまとめております。そして『帰国後の生活や教育』についてもアドバイスさせて頂いておりますので、是非ご利用ください。

帰国の際は、皆様自国へ戻るという安心感から特別な準備をされないようですが、特に学齢期のお子様を帯同された場合には、日本の生活への適応に注意を払う必要があります。その中でも帰国後の学校選択は、とても重要になって参ります。私どもでは学校選択の手助けとして『母親が歩いて見た 帰国生のための学校案内』を発行しております。

この学校案内は毎年9月に発行しており、昨年で28版となりました。製作にあたりまして心がけておりますのは...

第一に赴任前セミナーと同様に「確かな情報」の提供です。学校のご協力の下、帰国生受け入れ担当の先生から、直接お話をお伺いしております。パンフレットやホームページ上では得ることの出来ない入試の際の考慮点、入学後の特別指導の状況や、在籍する帰国生からは受験勉強や試験の様子など、学校説明会でもなかなか得られない情報を掲載しております。

第二に「訪問して分かる学校の素顔」を母親の目線で伝えることです。私どもが実際に学校を訪問し、先生や帰国生からお話を伺うと、学校の特色や雰囲気がよくわかり、訪問前と印象が変わった学校もあります。海外滞在中の方々にも、生徒さんへのインタビューなどから、学校の素顔を感じて頂けたらと思います。

第三に「シンプル・誠実・公平」をモットーとしています。私どもが子どもたちの受験を通し得ました、本当に必要な情報を各校同じ形式で掲載しております。帰国生入試を実施しておられて、且つ、掲載にご賛同くださった首都圏の学校全てを掲載しております。

以上のように、帰国後の子どもの学校選択に一喜一憂し、共に苦勞した母親の視点で編集された学校案内として、高い評価を得ております。以前に比べ、帰国生を受け入れて下さる学校は大分増え、選択の幅が増えてきたことは大変嬉しく思っております。しかし同時に、学校側が帰国生に求めるものも多様化しておりますので、そのような状況に合わせた制作を心がけております。ぜひ海外の赴任地においても、一人でも多くの帰国生とご家族の皆様、私どもの学校案内をお読み頂き、海外で得た貴重な経験を、日本の学校でも生かせるような、お手伝いができれば幸いです。

本日、会場後方にて最新版の学校案内2012年度版を販売しておりますので、どうぞお手にとってご覧ください。

その他、海外赴任中でもご覧になれる情報源として、私どもでは、**機関誌『フレンズだより』**を年2回、6月と12月に発行しております。先程の石川と荒木の海外生活での非常時の体験談は、最新号の57号の特集記事をベースにしております。

創刊は1984年で、当初は手書きのガリ版刷りで発行されました。それから30年近く経った現在でも、帰国生の子どもたちが抱える悩みや、親御さんの心配など、ほとんど変わらないといえます。特集記事ではタイムリーなトピックスをとりあげています。最近では、東日本大震災に寄せられました、各地からの声のご紹介、各国で、災害や、政治的な危機に直面した際の体験談などを記事にいたしました。

また表紙には「社会に巣立った帰国生」にご登場いただき、かつて海外で子ども時代を過ごした帰国生が、その後社会人としてどのように活躍しているかを紹介しています。

そのほか、海外からフレンズの活動を支えてくださっている、海外ネットワーク会員から、世界各国のさまざまな話題をお寄せ頂き、記事にしています。

また、首都圏の中学、高校の編入情報も掲載しています。年 1 回の改訂ですので、タイムリーとはいえませんが、どういう学校で編入の可能性があるのかなど、ご帰国前の皆様の、参考資料ともなっております。

発行に際しましては、わたくしどもの活動にご理解頂きました企業から広告を頂戴しております。ホームページ上にもアップしており、どなたでもお読み頂けますので、まだお手にとってみた事がない方は、どうぞフレンズホームページからご覧になってください。

私どものホームページでは、フレンズだよりを閲覧できるほか過去のシンポジウム・講演会の開催記録と共に、一部内容も閲覧可能です。そのほか、教育情報や、首都圏の帰国生受け入れ校の編入情報、海外赴任地情報などを掲載しておりますので、是非、ご覧になってください。

また『海外へのご赴任前とご赴任中とご帰国後』それぞれの場面に応じて、さまざまなご相談にもお応えしております。ご相談の際には、電話・メール・面談とニーズに合わせてご利用頂けますので、併せてご利用ください。

以上、フレンズの活動をご紹介させていただきました。

私どもは、海外赴任で得ました貴重な経験を、個人のものとして完結することなく、広く社会の皆様と共有し、より良い社会に繋がるお手伝いが、出来ましたらと願い、日々、活動を続けております。この機会に、ここにお集まりの企業の皆様にも、是非、私どもをご活用頂けましたら幸いでございます。ありがとうございました。